

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	大分県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	犬飼町立犬飼中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	2	2	0	5	12
生徒数	39	43	51	0	133	

研究の概要

1 研究主題

確かな学力の定着を図る指導法の工夫・改善
----------------------

2 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年生・国語 クラスの生徒が39名と多数である実態から、一人ひとりの生徒に基礎学力を身につけさせるためには、個に応じた指導が必要であるため。</li> <li>・ 1年生・数学 学級の生徒数が多い実態から、基礎・基本を確実に理解させるためには、個に応じた指導を徹底する必要があることから。</li> <li>・ 1年生・英語 中学校で初めて学習し、理解状況に差が出やすい教科であることと、学級の生徒数が多い実態から、個に応じた指導の徹底を図る必要があるため。</li> <li>・ 2年生・数学 苦手意識をもっている生徒が見られ、その意識の改革や理解状況の差を小さくする必要があることから。</li> <li>・ 2年生・英語 苦手意識を持っている生徒が見られ、理解や興味・関心の度合いに差が見られるため。</li> <li>・ 3年生・数学 苦手意識を持っている生徒が見られ、その意識の改革や理解状況の差を小さくする必要があることから。</li> <li>・ 3年生・英語 苦手意識を持っている生徒が見られ、理解の度合いが二分化される傾向にあるため。</li> </ul>
--

(2) 年次ごとの計画

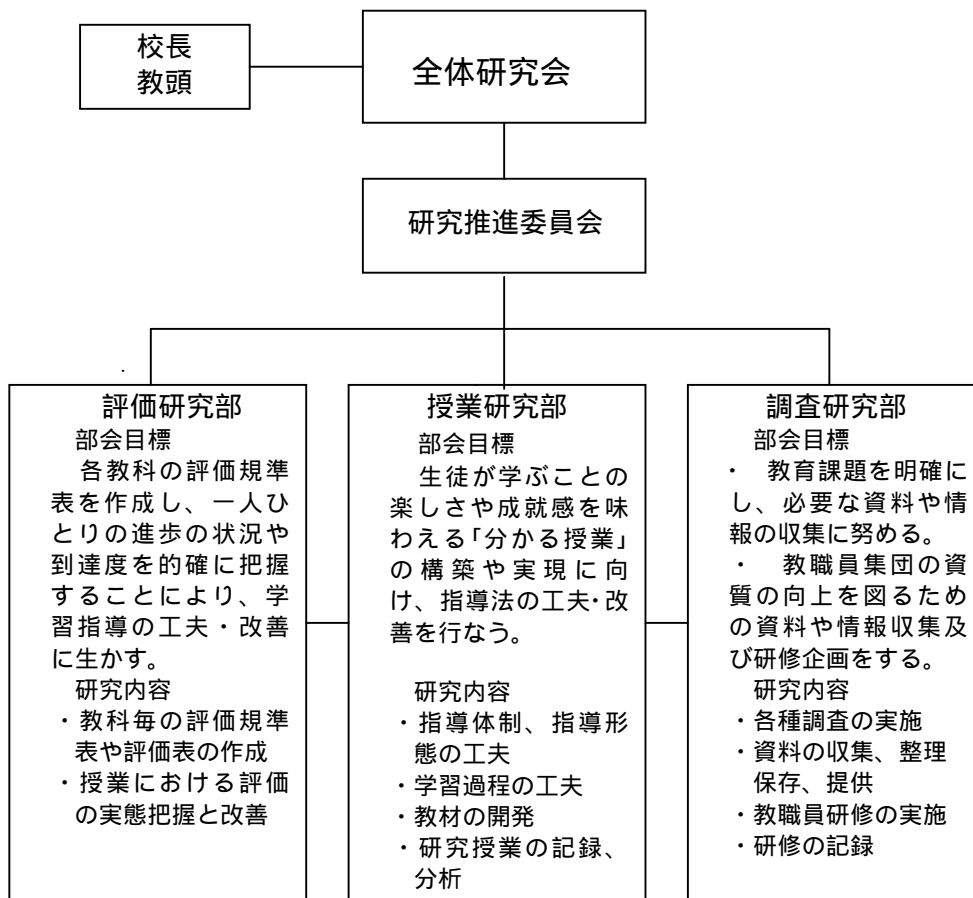
平成15年度	<p>テーマ 確かな学力の定着を図る指導法の工夫・改善</p> <p>研究の見通し</p> <p>ア 学習者の実態を把握して、各教科の評価規準を明確にし、少人数指導や問題解決的な学習過程などの、個に応じた指導の工夫・改善を図れば、学習者が自ら学ぶ意欲をもって学習に取り組んで、確かな学力を身につけることができるであろう。</p> <p>イ 教材の分析や研究を十分に行ない、評価規準を明確にして、生徒一人ひとりの実態に応じた分かる授業を目指して具体的な指導法を創意工夫すれば、教師の指導力が向上するであろう。</p>
--------	---

平成 15 年度	<p>研究の内容・方法</p> <p>ア 標準学力検査や学習に関するアンケート等の実態調査を行ない、学習者の実態を把握・分析し、課題を明確にして、各教科の指導の手だてや改善の方策をたてる。</p> <p>イ 教材研究や教材分析を深めて、基礎・基本を明確にし、評価規準表の作成を行ない、評価計画を立て、指導過程に位置づけた授業の構築を行なう。</p> <p>ウ 少人数指導やＴＴ指導等の指導形態・指導体制の工夫を行なったり問題解決的な学習や体験的な活動を取り入れた学習を充実させたりして個に応じた指導を推進し、研究授業を通して仮説の検証を行なう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科研究授業・・・ＴＴ指導による個別指導 問題解決的な学習</li> <li>・ 数学科研究授業・・・習熟の程度による少人数指導やＴＴ指導</li> <li>・ 英語科研究授業・・・ＴＴ指導（三人の指導者）による個に応じた指導</li> </ul> <p>エ 生徒会による朝の読書タイムや朝自習タイムの運営や活動の効果的なあり方を研究する。</p>
----------------	---

平成 16 年度	<p>テーマ 確かな学力の定着を図る指導法の工夫・改善</p> <p>研究の見通し</p> <p>ア 学習者の実態を把握して、各教科の評価規準を明確にし、少人数指導や問題解決的な学習過程などの、個に応じた指導の工夫、改善を図れば、学習者が自ら学ぶ意欲をもって学習に取り組んで、確かな学力を身につけることができるであろう。</p> <p>イ 教材の分析や研究を十分行ない、評価規準を明確にして、生徒一人ひとりの実態に応じた分かる授業を目指して具体的な指導法を創意、工夫すれば、教師の指導力が向上するであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>ア 前年度と比較できる実態調査を行って、データを整理し、変容の把握や課題の発見を行ない、その解決に取り組む。</p> <p>イ 評価規準表の見直しを行い、生徒の実態に即した指導と評価の一体化を図る。</p> <p>ウ 前年度の研究で検証できなかった部分の原因追求を行い、少人数指導やＴＴ指導等のあり方や問題解決的な学習や課題学習等を取り入れた、個に応じた効果的な授業のあり方を追求する。さらに、基礎的・基本的な内容の定着を図る指導法の工夫・改善を図る。</p>
----------------	---

### (3) 研究推進体制

- ア 調査研究部、評価研究部及び授業研究部の３つの部会の研究内容を絶えず交流し合い有機的に機能させ、仮説を検証し、研究主題にせまる。
- イ 全教職員で取り組み、お互いが意欲的に研究できるようにする。



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

## 1 研究の成果

- (1) 実態調査の結果の活用について
- ア 調査研究部を中心に実態調査の分析を行ない、生徒の実態を明らかにし、指導の手だてや改善の方策を立てることができた。
- イ 学級担任を中心に個人面接を行い、学習の進捗状況を知らせたり、学習に関する悩みを相談したりして、学習内容や学習方法の指導・助言を行なった。その結果、学習者は自分の長所やつまづきを具体的につかんで、学習の改善ができ、定期考査等の取り組みに向上が見られた。
- ウ 教科毎に、学習者の実態の分析を行ない、今後の指導の手だてを一覧表に作成した。そのために指導者同士が、他の教科の様子を知ることができ、授業の改善に活かすことができた。
- (2) 評価規準表及び評価票の活用について
- ア 評価規準表作成のための教材分析や教材研究が行なわれ、教材の精選や単元の重点化を図り、評価計画の作成をすることができた。
- イ 評価計画を指導過程の中に組みこみ、評価規準に照らして学習状況を的確に把握しようと努め、学習者の進度に応じた工夫された授業の実践を進めることができた。
- ウ 授業実践を通して、お互いに研修し合い、仮説の検証を図り、今後の課題を見出すことができた。

- \* 国語科研究授業・・・1年生 「言語を探検する」
  - ・評価計画及び評価票の活用と授業仮説の検証
  - ・T Tによる個別指導のあり方
  - ・問題解決的な学習のあり方
- \* 数学科研究授業・・・1年生 「比例と反比例」
  - ・評価計画及び評価票の活用と授業仮説の検証
  - ・習熟の程度に応じて学習内容を選択できるコース編成による少人数指導と合同授業のあり方
- \* 英語科研究授業・・・2年生 「Ainu」
  - ・評価計画及び評価票の活用と授業仮説の検証
  - ・T T（3人の指導者）による、学習の進み具合による個に応じた指導のあり方

### （3）指導について

ア 少人数指導やT T指導及び問題解決的な学習の過程において、様々な具体的な方法を創意・工夫したために、一人ひとりの学習状況を的確に把握することができて、振り返り学習や発展的な学習に生かすことができた。

イ 複数の指導者が、共同で教材研究をしたり、教具やワークシートの作成をしたり、指導についての相談をしたりして、お互いの意志の疎通を図ることができるようになった。

ウ 学習者の自己評価票から、学習の状況を知ることができ、適切な支援や助言を行なうようになってきた。

### （4）学習者について

ア 学習者は、少人数学習やT T指導等で、個人に関わるきめ細かな指導や支援を受けた結果、自分のつまずきや不得手なところの解決ができて「授業がわかった」、「できた」という成就感や成功感を味わうことができた。それは、「授業が分かりやすい」、「質問しやすい」、「一人ひとりに教えてもらえる」や「ゆっくり学習できる」という生徒の感想からうかがえる。

イ 発言や発表回数も増え、教え合う姿や質問する光景も見られ、ワークシート等の課題の取り組みに前向きの姿が見られるようになった。

ウ 評価票によって学習の状況を知ることができるようになり、個人の学習の改善に役立てることができるようになった。

## 2 今後の課題

- （1） 実態調査の分析や整理を行ない、成果や課題を客観的なデータで示し、授業改善に活かす。
- （2） 単元や単位時間の指導内容と評価規準を明確にして、指導過程の中で効果的な活用を図り、指導と評価の一体化を追求する。
- （3） 教科で学んだ基礎的・基本的な内容が、他の領域の学習活動に波及するような指導のあり方を研究する。
- （4） 「確かな学力」、「生きる力」、「指導のあり方」等についての理論的な研究を行なう。
- （5） 生徒会活動(学習部、図書部)の一環としての朝読書タイムや朝自習タイムの位置づけや自主的な運営のあり方を追求する。
- （6） 学年通信、学校通信や家庭への個人連絡票、保護者面談などを通して家庭との連携をはかり、個人の学力の定着状況や今後の取り組みについての具体的な内容を明確にして、学習意欲を喚起させる。

## 学力把握のための学校としての取組

- (1) 平成15年6月に、5教科の基礎・基本の習得状況を把握するための標準学力検査を実施した。
- (2) 平成16年3月に、1・2年生を対象に基礎・基本の習得状況を把握し、変容を調べ、今後の指導の手だてを講ずるために、標準学力検査を実施する。
- (3) 平成16年度も同検査を実施し、前年度の結果との比較から、変容や実態を把握して、手だてを講じる資料とする。

## フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 研究成果の発表
  - ・平成15年12月1日 学校間連携推進地域連絡会で、研究の中間発表を行なった。
- 2 研究発表会の開催予定
  - ・平成16年11月上旬に、竹田教育事務所管内の小・中学校及び県内の少・中学校を対象に、研究の内容を発表する。
- 3 研究成果普及のための今後の予定
  - ・平成15年度の評価規準表及び研究のまとめを作成し配布する。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】       15年度からの新規校       14年度からの継続校
- 【学校規模】             3学級以下                       4～6学級  
                              7～9学級                         10～12学級  
                              13～15学級                     16学級以上
- 【指導体制】             少人数指導                       T・Tによる指導  
                              その他
- 【研究教科】             国語                       社会                       数学                       理科  
                              外国語                     音楽                       美術                       技術・家庭  
                              保健体育                   その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】       有       無